
陽見シティーボーイズ

むしどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽見シティーボーアズ

【NZコード】

N8432L

【作者名】

むしじり

【あらすじ】

真下：ヘビーメタル、インター NET大好き。根暗人間。

矢田：行動派だけど、いざとなつたらへたれ。いつでもニヤニヤ人間。

夏木：女の子の趣味が特殊。黒髪ぱつつん大好き人間。

などなど

適当に大学生活をすごしてきた人たちの話

春休み明けの話（前書き）

フィクションを適度に加えつつ、現在進行形の大学生活を書きます。

日記代わりに書けたらいいな、と思って書きました。

小説なんか書いたことないので、へたくそですがよろしくお願ひします。

春休み明けの話

大学三年の春。

講義の合間に友達の矢田からバンドをやろうと誘われた。

矢田「バンドやる~。」

この時期になんてことを言い出すんだ、この人は。

と、思いつつ就職説明会などの直視したくない現実から逃げるため、勢いで言つてやつた

真下「いいよ。やろうか。」

矢田は高校で一年浪人して大学に来た。つまり僕（真下）より一歳年上ということになる。

音楽の趣味は自分とはちょっと違つて、主にBeatlesなんかを聴いている。

前にCDを貸してもらつたこともあつたなあ・・・。

そういうばぜんぜん聴いてないや。今度聞いてみよう。

真下「あれ？でも矢田ってギターだよね？」

矢田「そうだよ。真下もギター持つてたよね？」

大学受験が終わって念願のギターを買つてもらい、その後一ヶ月で練習を放棄。確かに、素敵なインテリアと化していたギターが僕の部屋にはあった。

ギターはまつたくやらないが、エアギターだけは週3でやつてる。

真下「他にメンバーは？」

矢田「いないよ。」

本当に何の問題もないかのように、そして爽やかにメンバーは二人であることが告げられた。

しかしそこは、今までの人生で友達に対して一度もキレたことのない温厚な僕である。

「じゃあ、ツインギターだね。」

と、ヘビーメタル雑誌を読んで得た二ワカ知識を披露しつつ、笑顔で切り返す。

矢田「そりゃ、ツインギター。」

真下「。。。他のメンバーも探そりよ。ギター一本じゃ寂しいし。」

「

矢田「ん?ああ、そつか。」

真下「。。。」

矢田「あ、夏木!おはよ。」

夏木「おーーっす。」

矢田「一限どうしたの?寝坊?」

夏木「自主休講」

この自主休講男も矢田と同じで Beatles が好きだ。ゆずも好きらしい。

女性の好みは髪型で決まるらしい。ちなみに黒髪ぱつんが最高だ

と言ひ。

矢田「夏木もバンドやろうよ。もてるよ。」

夏木「おお！ バンドか！！ もてそ^うだよなあ～。あの子も振り向いてくれるかな～・・・。アハハ」

あの子とは、夏木的ドストライク女の子『ひ子ちゃん』のことだ。黒髪ぱつつんの女の子だ。

夏木の片思ひの相手でもある。最初に言つておくが、乙子ちゃんには彼氏がいる。

卷之六

されていく。

矢田一 そうだよ夏木！だからバンドやろうぜ！」

夏木「俺ドラマやりたい。」

真下 一・二・三・四

勝手に盛り上がりつてゆく話についていけないでいるうちに、教授が
来て講義が始まった。

なんか講義終わつたら、大学にバンドやれる施設あるか調べよう的

なこと言つてた気がする。

まあ、いいか。暇だし。

そしてベースへ

＜一話＞

今後の生活に一切役立たないであることを延々と考え続けているうちに講義が終わった。

こんなことでいいのかな?と思つたけど、こつものことなので気にしない。

もしかしたら、自分は肝つ玉が据わっているのかもしれないで、などと考えていると

矢田「事務室行こう。行つて新たな扉を開こう!」

夏木「せやな。」

どうやら講義前のバンドのことで事務室に行くらしい。

そして夏木のマイブームは「せやな」らしい。

真下「そういえば、事務室行つた」とつてほとんどないね。」

矢田「確かに。事務室つてなんとなく入りづらい雰囲気だしね。」

夏木「せやな。」

矢田「ここが事務室か・・・。夏木先に入れよ（笑）」

夏木「いやいや、矢田先に入れよ（笑）」

お前らは付き合いたてのカップルか。
面倒くさいので取り合えず先に入室。

矢田「すいません。バンドの練習室つてあるんですか？」

事務員「ありますよ。お使いになるのでしたら、登録が必要になります。」

矢田「あ、じゃあ登録します。」

普段は頼りなさげだけど、矢田は案外頼りになる。さすが最年長。
ここはお前に任せたぞ。お前がナンバーワンだ。

説明を聞き終えた矢田によると、練習室を使うには予約が必要らしい。
と、いうわけで予約することに。

矢田「とりあえず来週から練習しようか。」

真下「ギター全然わかんないから、矢田教えてよ。」

矢田「真下ベースやれば？」

真下「は？」

矢田「いや、ベースやろうよ。」

真下「ベース持つてないし、っていつか急だな。」

矢田「じゃあ、帰りに楽器店行こう。夏木もドラムの教本とか買え
ばいいし。」

夏木「ああ、ついに俺もバンド始めるときが来たか……。」

早くもギターからベースに転向が決定。
これはあれだ、音楽性の違いで解散つてのも近いな。
音楽性以前の問題だけど。

大学周辺には楽器店がない。楽器店に行くにはモノレールで移動しなければならないのだが、運賃が高くて案外馬鹿にならない。

しかし、矢田&夏木曰く、我々の青春はそんなことには負けないらしい。

言いたいことはよくわかる。よくわかるけど何となく間違つてる気がする。

矢田「へへ、品揃えいいね。」

夏木「あ、『けいおん』モデルのベース売ってる。真下コレでいいじゃん。」

真下「一万円しか持つてないから買えないって。」

夏木「そつかあ、俺はドラムステイックの『けいおん』のにしようかな。」

矢田「安いベース、安いベースはどうだ?」

真下「なかなかそんな安いやつはないんじゃない?」

矢田「一万円台ならあるんだけどな・・・。さすがに一万円以下はないが・・・。」

夏木「お~い。ここに安いのあるよー。」

真下「うわー！五千円って・・・。」

矢田「安つー何これ呪われてるの?」

夏木「中古だしね。あり得る。」

真下「・・・。」

矢田「店員さんに聞いてみよう。」

夏木「おうー。」

夏木店員呼ぶ。

矢田「このベースなんでこんな安いんですか？」

真下（さすがに「呪われてるんですか？」とは言わなかつたか。）

店員「ああ、これですか。初心者セットって知つてます？」

真下「何かありますね、色々セットになつて安いやつが。」

店員「それの中古なんですよ。」のベース。」

真下「自分初心者なんですけど、このベースからで大丈夫ですかね？」

？」

店員「大丈夫ですよ。試しに弾いてみます？」

何か大丈夫らしい。安いしコレでいいかな。とか思つてたら。

店員さんが何か弾き始めた。

あれ？ベースつてこんな音だつたつけ？

何か迫力あつてかつこよくないか？

気がついたらベースを購入していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8432/>

陽見シティーボーイズ

2010年10月14日16時26分発行